



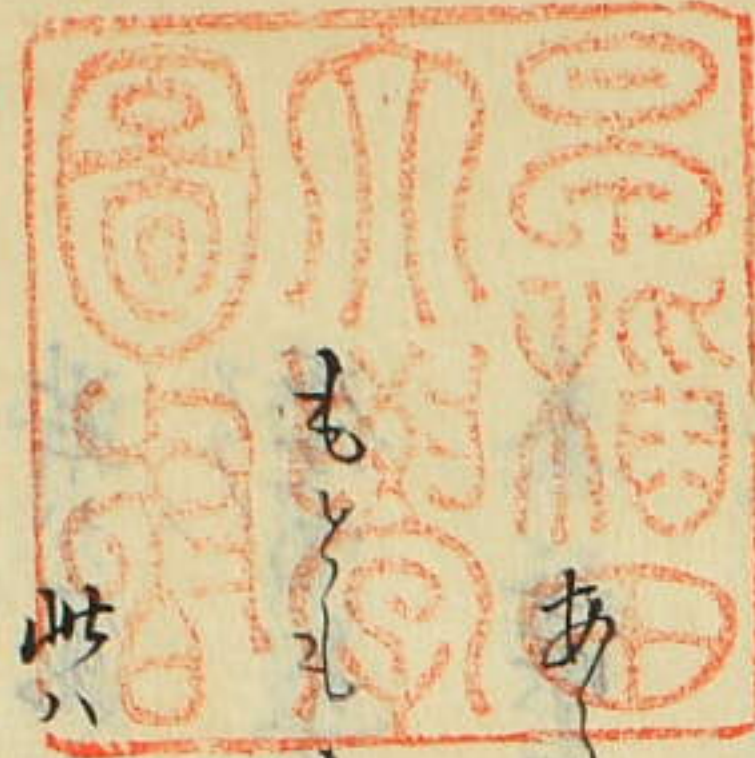
新鬼神傳

共二

下

□ 10
36
2止





假令源氏小宮宗廟と云々ヨシ宮を諸人ヲカ拜むも公オホウケ

より志の古きことありぬの御制ミサダメ古き事ありぬ

源國の制サタタを規ノリとて端ハシへきことありぬニシテサ況シテ也

あはれおきてもやニシテ

もと古小私事物を教ノシむことハ禁トシした事コト也

此大神宮儀式帳延喜式ありふりて

宮ニウツへ奉ウケ進メするハ禁トシした事コト也

但今の世乃如く家々小祀ミツり奉ウケ事ハ源平の私ミタ事コト也

つぎ世中私事ミヤモノ大沙神オホサガミへ諸國シタタの奉ウケ事コトの絶トシ

つぎしち僧の軍抄シラサヒを以モツて字ナリを定め法樂ホウガクと云フ

さて申す問ひの語にいへる治ともハ大凡学者の神の所上の
事を言ふに毎ハ治ともいへるけふハ治ともいへるの害とある
語も多しハ此所ハ交授くうるをたれと委曲ふまへし
申左傳ハ鬼神非其族類不歆其祭と云ハ中ノ禮記カ
非其祈祭而祭之曰淫祀淫祀無福と云へる歆ハ測
うる神の上を已ハ意もておさむと云ふく例のハ志説
ことあるにハ澤土少く王とあるもの天神地祇を祭
祀ともハ儒者の言をゆへハ天地の五とて天地の中ハ
居ハ天地の氣の身ハあつたりをぬきハ自然ハ天地の
神々の祭を享へきたつありと云ハ中ノ諸侯とあるとあるハ

一國の主は天子ハ天地の神を祭るべきいと云ふれハ只ハ封内
の山川をのぞくは下として此より以下太夫士庶人と五等に
分ちてそのいれを臨み祭るハ諸侯少くハ天神地祇を
祭るハ大夫少くハ山川の神を祭るハ士少くハ地を祭る
ハ士少くハ淫祀あり淫祀ハ神の福をふたつたつものハ決
なきことわらありといへる

此事お本委くハ白石先生鬼神論を乞ふ所し
歆多しぬといへるハ何を徴して云ふかを尋ね天地の
諸神の御徳少くハ生立ゆへんことを庶人少くハ誠
心く祭るを少くハ神いへる其多きを享てりといへるハ和漢不

唐人の身ありし神祇を祈りて其福ひを願はせり
多くあや鬼神非其族類不歎其祭と云へり信ふ事あり
中人ハ生てありし時の情も死に神冥とありての情も遠く
るありし時ハ生てありし時の情も死に神冥とありての情を
たよりし生てありし時の情ハ更ハ生てありし時ハ生てありし
人ありし時ハ生てありし時の情ハ更ハ生てありし時ハ生てありし
るありし時ハ生てありし時の情ハ更ハ生てありし時ハ生てありし
た如し思ひし力のきりいそむありしや歎くを死に神冥
とありし時ハ生てありし時の情ハ更ハ生てありし時ハ生てありし
あききなき情とありしむや

起るを陰陽五行の理を以て鬼神を論ずるに決然と
其の族類ありしもの祀を歎ぬ理を論ひて白石先
生ありし時ハ生てありし時の情ハ更ハ生てありし時ハ生てありし
とも生てありし時の情ハ更ハ生てありし時ハ生てありし
理のそありし時ハ生てありし時の情ハ更ハ生てありし時ハ生てありし

もし鬼神ハ此族の系を歎すと論じ云ふ人ありし時ハ生てありし
その情たのもしけありし時ハ生てありし時の情ハ更ハ生てありし
人の系を歎くも和漢のありし時ハ生てありし時ハ生てありし
の神を菅原氏ありし人の祀とて歎ありし時ハ生てありし時ハ生てありし
土ありし時ハ生てありし時の情ハ更ハ生てありし時ハ生てありし

福を多に与ふの著明をもおもふべし。初に孝を述べるに、
足は信タビうべき空論空理ふの泥に居るが如く、
鬼神ハ非族の事を敬はざるハ一偏不流後を信ツナ
ふ人ハ害イタく害サダケとある。語をさるハ冷の世不為う。養親
養子との中此語不惑トひてむハ自他オノツカラ不志親を
さして不慈不孝の基を祭オコはキもの也

若強て此語を主張せむとせば、儒者の孔子を祭らば
何事とや。朱子曰若祭其他亦祭其祈當祭云云。得而
不永歎乎。今祭孔子心於学其氣類亦可想と云へり。是
理コトハリめやうて、妙ゆるをさる。性理字義おとハ異姓の養子の

祭をハ先祖の灵の歎ウレと云へ理を言痛く論へり。儒者の
孔子を祭りて歎へき理あるは、其家を統るる養子の祭ハ
いやく歎へき理あるをや何の理をもおさむとす。
う斯カク前シ後リをハハぬ説コトも出イテ来ク也。然るを信ウヘひ居ヲる人
あるいとあやしく可笑事ある也。
古く漢國のや、
と云ふ事此歎多くある也。

序ソビテあるは此所を去るは此ハ南秋江。鬼神論不見え
し事あるは孔子と云若し何者の同くくハ九人於母
有連骨肉乎と云ひこれハ孔子と云へり。子見五穀乎

子路ハ剛勇ツケキみまさる。仕士ヲノコあるハ察オモク幽冥の理を信ず
形も足えぬもの不ツカ幸ツカ多しハ益あきこと小も思ひく鬼神を
侮アテむる不ツカ幸ツカ人々不イハナキ敬イハナキことあり世々しやうさうくも然ナら
幸のあつむる心志ココロひみち汝イハレありハ口クハ中ナカ人々不ツカ幸ツカこと
三ミハも学マナひて鬼神クワンシ不ツカ幸ツカへまつことコトを妨サマシげんと鬼神の可
畏ビシきことを知り死シを彼カレ不ツカ敬イハナキあきやうと誠マコト免イヒるあふ
倍ツカ

子路ハ幽冥の理を知り信ずるもおもハ鬼神クワンシ不ツカ幸ツカも
亦モを問トてやうと死生の事コトを問トへやうも知チく
亦モ孔子ハ亦モ問ト人々亦モ同トひて其答の別コトありハ許コト也

よく知チること也又問トていふく此語の同トくも子路ハやう
亦モを問トひしる各ト不ツカ知チ生シ焉ナ知チ死シ乎ナと云フ家語カゴハ子貢ハ
死者有リ知チ乎ナ將シ無ク知チ乎ナと問トひしる孔子答フて吾欲ス言フ死シ之
有リ知チ將シ恐ス孝子順孫コウシ妨シ生シ以テ送ル死シ吾欲ス言フ死シ之無知チ恐ス不ツカ孝ツカ之
子章シヤウ身ミ親ニ而シテ不ツカ葬ツカ賜ハ不ツカ欲ス知チ死者有リ知チ與ニ無ク知チ非ス今ノ之急後
自ラ知チ之トいへるとや一ツ意ニ小コ解ト釈ト人ニあり誠マコト不ツカさうとあるも
くハ事コト異トあること已シま子路ハ亦モ問トへて語トと家語カゴあることハ詞コトハ
似シて然レとも意ニハ亦モ異トあり然レハ中ナカ子路ハ亦モ問トへて語ト
の意ニハ汝イハレも吾ガもかく生シま出イデてその不ツカあきといふある理コトも
亦モ何ニして生シまやうと云フと吾ガ亦モ問トへて更ニ知チれぬ

あつたや無^レを況^{イニ}や心^{ココロ}にせぬ事^{コト}あるを死^シて後の事^{コト}依^レ
何^ニと^レ知^ルへ^キと^レ云^フは死^シて知^ルこと^{コト}の有^レ無^レを云^フ
ふはあらは

若^シ強^クて^シ未^ダを死^シて知^ル事^{コト}の有^レ無^レを云^フは云^フ也
自^ラと^レ解^スハ不^レ知^ル生^キと云^フハ如^ク此^ノ一^ト居^ルも死^シて生^キ方
の事^{コト}あるを云^フは死^シての事^{コト}ありし

又家語^ニ欲^ス言^フ知^ル之^ノ有^レ知^ル之^ノ語^ハ文^面の如^ク死^シての事^{コト}
去^リるの^レ有^レ無^レを云^フは死^シての事^{コト}此^ノ語^ハ去^リる^ノ道^ノ害^ニ
とある^レ語^ハ思^フ此^ノ語^ハ孔子^ノ不^レ信^スして云^フは云^フ
決^メて孔子^ノの語^ハ云^フは云^フ也

古^ノ家語^ニある事^{コト}も此^ノ語^ハい^ハく多^ク
然^レも不^レ信^ス此^ノ語^ハ不^レ死者^ノ事^{コト}の有^レ無^レを究^メる^ノ語^ハ左^ニ右^ニ
不^レ信^スと云^フは死^シて後^ニ自^ラ知^ル之^ノ事^{コト}及^ビ不^レ信^ス
究^メる^ノ語^ハ死^シて此^ノ語^ハ信^スは和^漢の識^見
者^等大^ニ凡^ニ死者^ノ事^{コト}を云^フは死^シて決^メる^ノ事^{コト}
鬼神^ヲ有^ル無^ク不^レ究^メる^ノ事^{コト}も此^ノ等^ノの習^ハ氣^ハ云^フて

孔子^ノの意^ハ然^レも云^フて死^シて知^ル事^{コト}の事^{コト}と堅^ク云^フ
死^シて生^キる^ノ事^{コト}の徒^ニ云^フハ家^ノ意^ハ死^シて生^キる^ノ事^{コト}
死者^ノの靈^ハ其^ノ所^ニ在^ルを現^シる^ノ事^{コト}ハ自^ラ然^ル不^レ怠^ラ慚^ムの情^ハ也

決めて仁智を善とする人となすを思ひては必ずしも
不仁不智の人也孔子の言をききては事ある人
論語を讀通す孔子の仁と云ふことをあきらむる
あき相ふ云々仁あるは智も其中ふこもあきらむる
語小古之人胡為而死其親也と云へば却て古の道ふハ
かたのや修けし

熟く考へ家語ある語ともの孔子の意とハ反對ある
を悟へて家語のちるは解の書とも孔子の語と
記しあるも此類多かれはよく論語とくへんは
さへきよあらず然るを信ふ孔子の説とすといへば此所

彼所と打合はぬことをも強く解きおく人もあるはいと
愚あることあるなり

おのも常ふふ人衆く知ることありと云ひ思ふ人ハ必孝の
人未むめりと云ふ然るハ先祖を愛する親を愛するも亦
心より出さぬふハ只文飾ひたりするのみ巧の所
為ふはありき又此所ハよく固あるハ云ふ人ハ論語
祭如在祭神如神在とあるを大概の儒者の解とす只
敬ふと云ふことをの言痛きやして云ひて神具ハ家ふハ
ものありとも在るの如く心ゆく事へともよく解くめりとも
神具ハ目前ふ其形を現はしたるハ禱ハ去る新きてもよき

却て己の神を多し心を却て孔子の情を云むハ己
鬼神を多しカ小治孝者の如く鬼神を疑ふ心ハ小治

ニツカミクニツカミ

天神地祇ニツカミクニツカミ死者の靈を却てハ

其の祭ハ小の如く現人ハもの言ハ事ハ其意更ハ異ハ

こハ多しハ禮ハハ貴人の禮をハ重ハ信ハてハ生ハるハ所ハ小ハ事ハ

中ハるハ如ハきハ孔子の神を多しハもハ此ハ如ハありハ事ハ

思ハふハ吾ハ不ハ與ハ祭ハ如ハ不ハ祭ハとハ之ハもハ實ハ小ハ事ハありハ

但ハかハいハきハ大言の如く思ハふハもハありハれハとハすハ

孔子の言行ハ人ハ小ハ絶ハてハ去ハきハもハ思ハふハ俗ハ意ハとハすハ

小ハもハてハはハ去ハるハ去ハるハ情ハ許ハむハ同ハ事ハ也ハ

鬼神のこハをハよくハ辨ハてハむハハハ要ハ小ハ事ハ也ハ

祭神如神在ハとハ言ハ語ハ物ハ々ハ書ハ籍ハ小ハ説ハありハてハ辨ハ

らハのハ志ハ心ハありハ為ハ祈ハ解ハのハ戒ハ令ハもハ小ハいハとハ左ハ難ハきハ

ゆハ急ハ終ハきハてハ事ハ々ハきハ任ハ然ハとハもハあハまハとハ志ハのハ志ハをハ

辨ハてハむハハハ後ハもハ新ハ立ハるハきハ事ハとハもハハハ已ハハハ然ハのハ

辨ハてハむハ事ハ

さてハ中ハのハ大概ハのハ人ハのハ言ハふハ事ハ々ハをハよくハ知ハりハとハ後ハ小

死ハてハ後ハのハ事ハをハ知ハりハとハ其ハ概ハ小ハ毎ハ引ハ出ハるハ事ハとハ

中ハのハ左ハ傳ハ小ハ子ハ産ハ々ハ云ハるハ人ハ生ハ始ハ化ハ曰ハ魄ハ既ハ生ハ魄ハ陽ハ曰ハ魂ハ

此ハ子ハ産ハ々ハ語ハりハてハ魄ハとハいハふハ人ハ生ハるハ小ハ始ハるハ其ハ父ハ也ハ

身を體と云ふ一きものを云へるはくさくさく云ありきと云
杜豫也魄ハ形ありと任きり御ふ中も魄者陰の能也
多き後もありく彼是中きりり朱子云と二説も小
取く此をも彼をも説ゆてよし云と誤美しと更ふ
考るとちありぬ後ともを多く云へると其辨はくさる
ハ云ふいと云

と云ひ中々禮記の祭儀中の家語小孔子の語ありと人
生有氣有魂有魄氣也者神之盛也魄也者鬼之盛也衆
生必死死必歸土此謂鬼魂氣歸天此謂神合鬼與神而
享之教之至也骨肉斃于下化為野土其氣發揚于上為

昭明君蒿悽愴此百物之精也とある云を云きと人生も
死ぬるとハ陰陽ニツの氣の聚ると散るとふく聚は人と
あり散りてハ元の陰陽も彼もその氣を去り煙の勝上るか
ぬく何祈ふ歸くと云ふ事なく消散るか生生死死鬼一ツ
亦てニツふと一ツあり

祖徠の鬼神備ふ有無者鬼神之迹也云々有之與無代々
同く嬗愈出愈新愈動愈不屈周之言曰以新盡而火傳未
見薪火之為二亦孰知焔續焔逝者如斯天而知道者
見其常無死焉是以遠古之無疆盈六合之中洋乎
莫非是物也云こと以てハ先儒の説とそかく異なりと

大小同... 祭... 氣...

子孫の祭りをたはふ及びて素格とてハ子孫ハ此祖先の氣
ある故彼是も亦一氣ある祭礼ハ其の誠をたはふとき
同氣に感して感格ありといへば亦祭礼儀あり人生
有る氣云々の語を孔子の語ありと云ふをハ信じてしけるハ
論語よりして熟考する孔子ハわかると隠してをたはる
知るべきをさへ人といふは亦ハ亦ハ此ハ決めて
後世の小さなき者の孔子ハ託する妄説あること痛ひ
起るハ一層この上を問ひて志の陰陽聚散して人上生
氣魂魄と云ふ三つの奇物を生じてかく活動する陰陽

消散と云ふときハ此の魂ハ天に發揚し魂ハ亦歸ることを
何の理よりして然るやとて同氣相感あるやとて子孫
の別て感格あるやとて何なる理よりして然るやとて
窮め問ひてむふはいふとて亦云うてハ玉子の聖
人類を聚めて考へるとも知るのみあるやとて亦云うて
孔子ハ不知生焉知死と云へり云々

此語の意ハ既云へり... 然る人生も此の古と死て後の理あるを推慮するは
益あるものあるは只ハ古傳説を考へて人の生もことハ天
津神の奇妙ある産靈の清異よりして父母の生ありて

死シス其靈永く黄泉カモミヤに歸居るを人其を祭イハす
歎ウラるも在アリテ信ト心コ居ル里ニく強ク其レ上ニを穿タツ鑿ツでもある
へきものありとい此上への人の智サトりてハ冥ミコトに測ハカりてく知チる
うきまのありといあは孔子も於テ其所ニ不知シ蓋シ闕カ如ク也といひ又
述ツ而不レ作レ信ト而好古トあとも云へるふあはれやその上へ靈異を
ふはれといハ同氣相感トといふと云はれ其子孫トする者の禱イハふ
かありハ冥ミのありとい程ハあるふ然レをあるハ冥ミ魂タマの崇タカまを
あまら福サイヒを興トへたるため多くあり然レも左傳成公十年
晋景公ト夢ル大厲被髮及地搏膺而踊曰殺余孫不義
杜預ト註ス小いといく厲ハ鬼也趙氏之先祖也八年晋侯殺

趙同趙括故怒ル
余得請於帝矣據大門及寢門而入公懼入于室又據戸公
覺召桑田巫巫言如夢

註曰巫云鬼怒如公所夢
とんく此崇り終ニ止マて景公ハ死シりてうきまの事コトを
とも人死てハ魂魄消ナるト知ルるトあはれといハ死シの事コトあり
を悟サトるト骨肉ハ折クて土ニあまると其冥ミハ永ク在テか
かく幽冥ウツシより祝イハ人の祈イハ為ニをよく又冥ミありをい
但シ此等ノ事コト理リ学ガク者ノ流ニの論ハひハ己ノ心ニ迷ヒ出スる
ありといく彼冥ミを踏フて擔カありと思へる法ハ河ノ地ノ獄ト

の父の魏顯イニふよる、いひ云へる教の事、存教イニふ、
知るを是ふも中へ説を伴せていさく人鬼之氣則消散而
無餘矣其消散亦有久遠之異人有不伏其死者以所既而
此氣不散為妖為怪

篤胤云不伏其死ツケキニトハ猛人の軍ふとふ出く戦死タカヒニする
ハ暴悪人の刑戮ツミナにまゝ死シニする又自縊ミツケラケニ自刎シニするハ
ウラミを抱きて教コトをまゝする人ふとをまゝ之まゝの死を
為スするものハ魂魄カもととの陰陽カ不復カ也均カびて妖怪
のふを為すとある

如人之凶死及僧道既死多不散

篤胤云其註イニ不イニ伏イニ僧道勢ツケキニト養精神所以凝聚不散
と云り白石先生曰僧道ハ僧と道士と云ふと云ふは
此ハ物カもあらず

若聖賢則安于死豈有不散而為神怪者乎如黃帝堯舜
不聞其既死而為靈怪也

以上本文朱子語類の説之下イニあらずとある
と云ひ中へ聖人安於死死即消散イニと云へる此ハ子産の
晋國へ往きたるに趙景子と云ふ者伯有猶能為鬼乎と
問ひたるに答へて能人生始化曰魄既生魄陽曰魂
杜豫註不魄形也陽神也と云へる篤胤謂イニと云ふ

魂十二の十二字、前ふいふは、推慮の説、此は、
其用の陥り、如し、能用物精、云々と連続、
よ、ゆ、と、あ、を、や、熟、考、へ、

用物精多則魂魄強是以有精爽至於神明匹夫匹婦強死
其魂魄猶能馮依於人以為浮厲况良霄伯有、
我先君穆公之曹云、而強死能為鬼不亦宜乎云、
例の信、
子路、
軍、
厲を為さず、
のなき、
達士、
死、
安む、

其氣沉滞、
亦、
寛、
寛、
先、
朱子、
以、
否、
例、

埋めたる地を造りて萬人坑と名付し空日有り而陰
ときるとい往來の人之冥の爲悩まきて死る者多しあり
これ其地小寺を建醮をち崇を和むとし今も
お本止すて尾を撃おとさる僧もも去りて畏まれハ
大祖の云へるハ孔子ハ大聖人おまハ決めく此厲を然め
強んて孔子の木主を其所へ遷し今も亡冥を
崇りて止るるとい群談採餘と云ふもの不足り
前の王曾くハ彼の輪廻めりるのち造ハ信
とも後ちハ其證あると云ハ争ひりて五雜俎も
余於曲阜見孔子手植樹云孔子林十里中雲本參天上

無鳥巢無鴉声下無荆棘蒺藜刺人之草聖人生最
不語怪乃身後著靈異若此豈亦以神道設教耶抑或有
地靈呵護之亦も足え本木の條も何れ其の書も
教のことに感念ありしものちも足りしと今もいハ
ゆものやんち年
もしくハ孔子をいさる聖賢小致し今もをむのちも孔子ハ
安むやうしや理をちて推する論ひいりてち存れぬ
其のち多かれハ只死して其冥黄泉も歸き居る物と在の
候も心好く厲る厲るぬもともハ冥とありての情ハ
さぬの故測りてくとも強くそれありといふも

あつたあそびをよめてあつた死をよめてを白石先生の論小
夫水は至る清なりとも水をむすふ時ハ明あつた神なりと
明あつたも形をむすふ時ハ明あつた水とけて清なりと
形散してハ明なりと故ハ学んた美あつたにして愛ハ愛ハ
生るハ美あつたにして死するハ美あつた人死して厲をむす
たまふ不同と云筆又倍所謂生美の字を論ひて云水ハ
死するハ厲を為すハ神の形去るハあり生るハ妖をむす
中ハ神形を去るハあり死するものハ神永く形を去る生る
ものハ神形を去るハあり死するものハ神永く形を去る生る
あり神ハ主人あり神永く形を去るハ一ハ一字を去りて萬里

の如小行通るあり神明出入するものハ朝ハ家を出て夕ハ
家入通るあり家を去るものハ遠きをむすハ異ありといふも其
家を出ていとむす業あることハ彼此も大同小異なりと云れ
るハ家小然もあつたと思つたたりあつたと此ハ宋儒の説
あつたよりと論述して例の推慮説あつたハいふあつた
あ本此先生の論ハ亡魂の人の形よりと詩賦ハ文を
書くことと遊魂の人の代りてあつたことと人を取らる
ものあつた云ハ一赴冥小ハ信うるも從あつたも一通り
あつたハ面よりき論もあつた此ハ彼の論を披きとて已
て定むるありとて又佛者の云ハ帰還するあり

さるハ何某ハ何某の再生フタヘヒシ也ヤル前牙ハ虫出テありき
歎ふとありきかとの數あり儒者ニを破ルとあり死
之ハ神と形と相離連形朽てハ土とあり神ハ風火のこく
散りて去ることハ一隙ハ木葉の花の今年咲クハ往イシトシ年の
必ありぬる也一又川水の今流るハ昨日の流ル水ありぬ
如し死する人の死ハ如しぬる也是ハ等トしき人生ハ一年ハ
木の葉より木を生りぬる梅の葉ハ梅の樹とあり梅の葉ハ
梅の木とあり梅の葉ハ梅の木とあり梅の葉ハ梅の樹と
ありとありしいて人死ク再生スとあり禽獸虫魚ハ生ルと
ありコト理コトありむやとありみふりり興ヲを佛者更ニうけひに
興ルハ晋の羊祐ハ金環ヲをん知ル

此ハ蒙叅ハ祐年五歲時令乳母取祈年金環乳母曰
汝先無此物祐即請鄰人李子東恒桑樹中探得之
主人驚曰此吾亡兒所失物云何持去乳母具言李氏
悲愰時人異之謂李氏子即祐之前身也
まゝ鮑親ハ井ハ隨テ死スとありコトを

此ハ蒙叅ハ五歲時語父母云本是曲陽李家兒九歲
隨井死其父母訪問皆符驗
ありとありいりふとありハ儒者ニを破ルとあり更ニ辨スとあり
ありコトまカとありコトまカ安カ説キありとありコトひテ強クとありコトひテ破スとあり

まありなる小物部徂徒の論ひ小謂人死歸造化者昧乎夫
一者也化為異物亦何所不有不可為典常亦何拘拘乎云々
る六通の儒者の強ふ云ひ破らんとする歎ふはあはれいしく
感^大て佛者の所謂輪廻やそのありもなきこと小實小ある
ことありその存ないことあるがよして御もとも知ること
あり此の神の幽冥あるは神のありあや然るを儒者
絶てなき事ありと云ふ偏^{カク}あたりにする佛者の此を
て御と云ふもいと僻言あり實小の輪廻と云ふは神
てその民を導くとしてよく稀小なるを種と云ふ造^{ツク}
事あり天竺の人いふ小愚ありして是れ小微ありといひ信^シ

途ハあり佛法云々了後にも大概此類は彼のいふ
佛を讐むと欲しと云ふを佛と云ふ所^レあり
御ハ彼國の訛あり天津神の傳の少^スなり
と思はるるを種と云ふ天堂梵天帝釋と云ふものを説き
黄泉の傳の訛ありを種と云ふ地獄を説き海を
の傳と云ふを種と云ふ龍宮と云ふを種と云ふ
以て云々
よも辨^ハて知^ルん使^ハすことありあきまのありあはれいしく
あり其徂徒の舍利記と云ふ文も後世儒者所見多し不及浮
屠者と云々云々世人字句をぬん^ハ幽冥の奇^キ怪^ク

事コトもそのコトをコト不コト熟コト小コト洋コト字コトをコト人コト都コトでコト知コト見
狭コトくコトあコトりコトくコト幽コト冥コトのコト子コト其コト解コトもコト奇コト異コト小コト口コトつコトるコトをコトハコト一コト向コト小
まコトひコト得コトるコトもコトあコトるコト

此コト事コトもコト祖コト徂コトのコト論コト治コト微コト小コト割コト樹コト以コト求コト花コト於コト其コト中コト焉コト能
見コト之コト謂コト之コト無コト花コト可コト乎コト哉コトとコト云コトへコトとコトめコトし

とコトもコト少コト小コトハコト妄コトあコトるコト虚コト言コトをコト云コトひコトすコトハコト埤コト滸コトあコトるコト者コトもコトあコトりコトて
犬コト神コト外コト法コトやコトのコト事コトをコトあコトりコトてコト人コトのコト眼コトをコト睜コト免コト或コトハコト天コト狗コト狐コト狸
あコトりコトのコト数コトのコト解コトもコト奇コト異コト事コトあコトるコトものコト多コトくコトあコトりコトてコト人コトを
誑コトまコトすコトとコトあコトまコトしコトハコト奇コト怪コトきコトやコトとコト一コト向コト懼コトまコト感コトずコトもコト愚コトあコトるコトを
よくコト其コト信コトへコトきコトとコト信コトくコトへコトとコトまコトをコト辨コトくコトとコト惑コトいコトはコトるコトをコト恐コト

三下 サト 智チのノ大ダイきキあアるル人ニとシまマへヘたタれレさサてテまマるル鬼キ邪ジャのノ事コトをコトあアるル
小コト語コトもコトよくコト引コト出コトるコトこコトもコトあコトるコト西シ戎ニ國クニ宋ソウとシまマ伐バツ小コト張チヤウ横コウ渠キョウ
とコトまマ若ニク者ノ若ニクくク巧コウ小コト臆オウ度トあアるルをコトのコトあアりコトてコト下ゲ吏リをコト一コトツツのノ
祠ヒコラをコト毀クニしシてコト免メむムとシてコト下ゲ吏リハコト西シ戎ニとシまマ小コト軟カン柔ユウ少シヤウあアりコト
てコト歩フりコトこコトしシてコトけケこコをコト強キヤウてコト輿ウ小コトのノうウてコトをコト祠ヒコラ小コトあアりコト神
像シヤウをコトあアりコトてコト割カつツてコトアアるル中チュウ小コト一コトツツのノ合カあアりコトてコト中チュウ小コト志シらラき
大ダイ虫チュウあアりコトてコト走ソウりコトあアるルをコト一コトツツてコト油ユウ小コトとシてコト煎ケン殺シヤツしシてコト是シ邊ヘン
下ゲ吏リ脚キョウのノいイしシとシ忽コト小コト愈ユウつツとシまマしシ性シヤウ理リ字ジ義ギとシまマるル
書ショ小コトんンとシてコト此コト所ショ為ニあアりコトハコトいイふフもコト雄ユウとシまマ猛メイきキ事コトのノ
ぬヌくクあアりコトとシまマ物モノのノ心シンをコト懸ケンくク思シぬヌ逸イツ心シンのノ徒トあアりコトとシまマるルとシてコト

まてくき神の上を古と尋ふ准へく丸く云ふむくの事
つるハもく鳩許あふ事あり

我翁の曰く迦微とハ天地の諸の邪を始て其を祀
まじ社山より神御美をも申し又ハさくハもいたはる獸
本草の類ひ海山もも何何山もも尋常あふんてんて
徳のありて可畏ものを迦微といひてあり抑迦微ハ如此種
あて貴きもあり穢きもあり強きもあり弱きもあり
善きもあり悪きもあり心も行もそさふ不陸ひて
くあも考き穢きふもききく多くと最いやき神
の中にも徳あるもあつて凡人も肩もさあつたの狐も怪

しきみのをふれといひふも可畏く巧あるんをつけて及き
ふあふれまこと小邪もあつても治す物あつたす制せらるる
まのまの微き獣あつたやまこととせり類のいし穢き神の上を
のいんといふあつた神といふも理を以て向つた可畏きやあ
と神もハさき穢き威力のあつく差あるふをいふもせり
ひりて也といふもしを熟く思つてきこつたなり

但徠の天物説と多ふ文小夫神者聰明正直者也云故
或以為神為仙或以為佛為菩薩為羅漢明王為魍魎
罔西人各徠其所見建之名稱といふハ略とす心てなり
あつたなりきつた小徠徠あり

彼祠ありし虫も初めて吏ハ己ハ位祈を毀むとて來るとを
知ると渠の兩脚を軟柔ふしうしハいと奇異き行きて
其の神もまとも怪いと愈救さまぬといと拙き言甲斐
あき有さず也去へて世ハ狐狸也と其俗も種々まじりき
おあましく福行むとてハその本ハ三本福津日神の正心より
あましく人の是を制する威力あましく直日神の御冥の
ふきたくしてあまねく直く即く雄々しき大丈夫魂を固
めさるるハ狐狸也とて去へて後ハ妖怪物ハ悩ませしとてふ
さるハ自ハ即しき神の湯冥物とて禍年かの程のあまを
あや

漢籍小妖ハ徳不かりと云ふハ少く此心也不稱不徒也
又彼國唐と云ひるハ代ハ天竺國より海を渡る法物の
人を呪ひく或ハ活し或ハ殺し或ハ心の候ふくを僧衆
と云者を呪ひく不傳賣ハさると不買ゆることあく却て
彼法所の死するよりと云ふハ一ハ法所の死す
然れどもいりすと猶も極き極きと云ふハ妖怪物
ふかつこと能はるしと遊さるるもあまハ此ハ彼の福津
日神の意ハいとき時ハ直日神の法威カホもおもふ
ことあまも同裡也と云ふハいふ極き人等も遊さる
かたのてて決めてハ云ひくことあま

周小記す世の人の心印シテく猛マダき人の妖物マカモノ小遊コユき事
ありと云は実小遊のありとあるの孔子の陳蔡の間小
飢ウツたるときいふ大さある男の鬼キき衣コトモ小言コトバき符カフきこと。
来て人を驚オドロけりしる孔子の子路コジロをシてテるル例レイを
くふ大さあるナツ籠カゴふてルをテ路チふルをテ教シてテ去リく
喰クひ日ヒの飢ウツを清スきルと云ふこと又漢の代小董仲
舒と云者の一人の来キりて明日アス日ヒの雨アメ降ルむと
云ひ去リて董仲舒トウチュウの云クふ小穴コアナ小住コヅミむルのハ雨アメを
去リて我ガハ必カナラく穴アナ小住コヅミむルのハ其
人忽トウ小狐コキツとありて近チカけりト云フりテ引ヒかスるル

あるの此等ハ奇オドロきニ行イふハあまニ此ノ妖怪マカモノ小
悩ナギぎニ迷マひテ遊ユぶハ怖オドロかシ物モノハ籠カゴの
ぬき魚イサ狐キツハ物モノ小似コニ似スるル獸ケモノあるを共トくシてテ世ヨのノ人ヒトは
眼メをカけテ見ミらズるルあリてテ何ニもシらズ小惑オドロかシれルぬ
と云フハ籠カゴを籠カゴと見ミぬルを狐キツと見ミぬルと云フハ
斯カク正シしく止トりあリてテの狐キツ籠カゴ小遊コユき事コト上ウへニあリて
上ウへニあリて尋ヒたル人ヒトハ悩ナギぎニ迷マひテ遊ユぶハあリてテ人ヒトは
俗ソク小自コ小下カて狐キツ籠カゴを人ヒトと見ミぬル人ヒトの是コト小あリてテ
上ウへニあリてテいフ多ク笑ウふハ常トもあリてテかノ五イ十ジ歩フと云フ
百歩ヒャクを笑ウふハ常トもあリてテいフ小猛コマダき人ヒトありテと云フ

きつりて固く決めくは云ひくことと於此有るを

中問て云く普通ヨソツネの神ミカクシロ小御係代を没くると云く

非常あり木石金土のなき無情ムロナキの物小いして郊シラシ野のあり

初ハツメとて感格ある事ハ堅く念オモヒを凝ツクりし己心より感

出デりありと云く此論ハいふ己云ハ彼の虚妄不昧自固有乃

常トコナリ小なる事とて神明を感得あると云く類の事を飲シユる

徒トモナラフの更小神のこをわぬ如論あるは云く云く是く原

此コノホカ餘小程伊川ハ今人以影祭カゲノマツル一髮髪不相似則所

祭已別人と云へる語を引く論コトハ朱熹の有其誠則有

其神無其誠則無其神と云へる語をひきく云くものも

あれと云く非ヒカト徒トモナラフ為を疎ス小朱熹の云くハ彼佛即是心即

是佛と云へると云く抱エミあると云く家ミヤトふると云く漫マナシ説

あを勤ツラく感カふと云く云くある也

然シカまもいさう云く云くハ木石金土おとを以て造ツクリりし像カクシロ係

初ハツメとて効驗キウケンあると云くハその禱イノリをわく人の言コトと云く云く云く

神カミ其コノ當トキを云く云くと云く云く更さらふ疑ウタガハシひありいふ念オモヒひを

と云く云く云く心をおもむると云く云く云く云く物モノの念オモヒふ

在アリ受ウケを云く云く云くりの具ツグハ己ココロ心と云く出デ本ホンぬ口クチがあり志シも相アヒも

今イマ方カタありと云く云く感カ念ニもあると云く云く云く此コノ事コト舊フルと云く云く確ツク

あまも石と金とを執シキリて火を出しと云く云く云く理コトハリふと云く石も金も

火を合さるる物あるも石をよつて火出ることなく金も
りりあても火出るるよしと人も七奇異き異のあるものあり
く其果を凝しと行る能ハ神を道ハ感と感臨あるなり
此理ゆへ熟し思ひをたてめと考へるるあはれ冷の疑ひも
自然とて収めむさ道ハ木像石像あつちのその人信の心を
祭しと行しと道ハ神をさりて思ふ木石像あつち木を
人ハ其勤ととある石ありんハ礎ともあつち

然も此ハ道ハ情ある者の思ふべきやあはれ西戎國
唐と云ひたる代ハ狄仁傑と云ふ者江淮と云ふ地ハ
南と云ふ祠廟を一子七百たりや毀れしと云ふを志願

道ハ志あるハ大志ハ心好有るものあり狄仁傑あり
新為ありと人ありと云ふ事あるは尋のことと

本文ハ編みとておもしろい怪しむる事なし

俗諺ハ彌の路も信心しと云ふ事のあるも道実少き
こゝろとて漢土とて鮑魚を祭りて祠ありとて感應あり
アハるる達の傍ある立樹ハ折れり草鞋の劣千と
あはれとて草鞋大王と稱しとてあはれとて効驗ありと云ふ
敷利澤ももふありとてあはれとて志願の神とてなると
只草鞋鮑魚を酌し禱しとて効驗ありとてあはれとて神を

よりまゝ感格あると云ふを疑ふ人もあらず。此ハ鮑魚菜鞋
かゝのこよき人の惑ひ信せざるにつけく妖怪まよと云ふをばくち
本々として其の効験をあつらひしと云ふ事ハ

此ハ白石先生の云なれどとて或ハ人遊魂の憑藉ヨリツキと
怪をあはくともある一ノ草鞋大王の号ありしも實ハその
辺エルツカヒなる老舗兵の憑藉とて怪をあはくともあると五雜
俎ニハスに見えたる事

やゝ更ふ人の講くぬふも古き怪物とて手回りの本尊と
して怪をあはくともある此等ハ例ハ鬼邪の憑依してその下
なる妖怪の憑藉と云ふにありたる事

搜神記と云ふ若小孔子の語とて我聞物老則群精所
之と云て亀蜺草木魚鼈の類とて之を以ておハ神
憑ヨリつきて怪をあはくとも信せざる事あり此ハさもある

倭

まゝも一ハ實ハ邪の汚心とて有怪の物ハ為した事と云
やゝハ草木の類とて之を以ておハ實ハ有怪ありん事と云
へり此ハ誠ハ測り難き事ありある事本此等の事ハ存
かへりく云ハおハれとて其類をばくち此等ハ云ハれ
此のこゝちハ原々一と神の上の事なりと云ふ事ハ似て
よく以來兩部と云ふはよく其神ハ本地觀世音と云

生を或ハ大日如来小と坐にたて言ひ立ス小系存まを神
の事ハ更小おきくク壁ハ安蔭の窟ハ小サナリハ
天竺國辨女天女とハ小サナリトク奇ニ奇ニ奇ニ奇ニ奇ニ
りハさハをさハ小崇めたハもハかハ割ハ小慈ハ慈ハ
坐ハすハおハといハくハたハくハ小具ハハハ奇異ハハハ誠ハ小測ハアハ
ハ神ハのハ上ハあハるハあハ可ハ畏ハ漫ハりハふハくハ議ハをハ申ハすハ
華ハ小ありハ原

又同じくいハくハ此等ハのハ数ハのハ怪ハきハ行ハをハあハらハ
す行ハとハあハハハ何ハとハさハハハ差別ハあハくハ憑ハりハくハ子ハをハ本ハ小ハくハ樺柳
ふとハあハりハハハ芭蕉ハふハとハのハ大ハ概ハ定ハまハりハるハれハくハさハるハこの

あハハハいハくハふハさハ色ハきハうハハハ測ハまハりハくハ細ハきハもハ強ハくハ冷ハ減ハ
云ハりハ椿ハ柳ハ芭ハ蕉ハふハハハ神ハのハ憑ハ籍ハもハあハりハ存ハむハとハおハきハん
湖ハむハらハのハあハるハ歎ハもハ多ハきハ申ハ小ハ狐ハ狸ハ猫ハふハハハ奇ハ怪ハのハ行ハをハあハら
華ハ積ハまハりハとハ同ハ心ハをハあハりハまハりハくハさハるハのハさハもハ強ハくハ其
首ハをハ定ハめハるハもハとハるハ神ハのハ憑ハ所ハをハあハりハ知ハるハくハさハるハあハりハ
知ハるハくハさハるハくハ異ハるハさハるハあハりハ世ハハハ恨ハもハあハくハ奇ハ怪ハの
事ハあハりハのハあハりハ武ハハハ有ハ怪ハのハおハのハ言ハ情ハのハもハのハ化ハりハ
さハるハハハ世ハ役ハあハりハ聖ハ賢ハのハ古ハ事ハもハ皇ハ國ハ小ハハハ姨ハ石ハあハりハ数ハ
或ハハハ無ハ情ハのハおハのハ有ハ情ハとハあハり

あハりハハハ小ハ麦ハのハ蟻ハとハ化ハりハ杉ハ菜ハのハ蛸ハゆハり

或ハ男愛アリク女オアリ女愛リク男オアリ

さハ漢書哀帝リ建平年中ハ孫章と云地ノ男化リク

女オアリ人ハ小娘キクク子ヲ生ムコト又ハ晋書ハ惠帝ハ元

康中ハ安豊ト云地ノ女化リク男オアリ十七ハ八歳ハ少シアリテ

性気成ルト云ハ小オト云ハ此ハ今ハ昔ハ同シクシ也ナ

或ハ人愛アリク相オアリ

物ハ淮南子ハ小牛哀ト云ハ若ク疾テ七日ハ少シアリ虎ト云ハ

其見を博ヲ殺スト云ハ隋書ハ文帝ハ七年ハ小相割ト云ハ

地ノ桑門長二丈ハ九尺ハの蛇ト云ハ樹ト繞リクシテハ

抽クト云ハ数ハ本ハ多クアリテハ是等ノ相ハ化リアリト云ハ

本草ハ細目ハ論ハひク淫ハアリ若クハ化リクハ狐ト云ハ至ハ暴ハ有ル

若クハ化リクハ虎ト云ハ心ノ愛ハスルコト又ハ愛ハスルコト又ハ愛ハスルコト

白石先生ハ此説を好ムト云ハ是ハ暴惡ノ心ハ有ルコト云ハ

人ハ未ハ化セズルノ虎ハ貪ハ慾ノ心ハ有ル若クハ人ハ未ハ化セズル

未ハ化セズル狼ハ其ノ化セズル如ク之ノハハ狼ハ其ノ形ノ心ハ

一ハハ愛ハスルコト又ハ愛ハスルコト又ハ愛ハスルコト又ハ愛ハスルコト

愛ハスルコト又ハ愛ハスルコト又ハ愛ハスルコト又ハ愛ハスルコト

人ノ石ハ未ハ化セズル其ノ人ハ未ハ化セズル右ノ心ハ有ル人ノ形ハ

事ハ強クキリ理ヲ云フコト又ハ強クキリ理ヲ云フコト又ハ強クキリ理ヲ云フコト

人ハ只ハ小ハ邪ノ所ハ有ル知ハ是ハ凡ハト云ハ至ハ暴ハ有ル

さて中々男の女とあるハ陰の陽不備あるハ國の亡ホロ不シ隆シ
ありと云ひやる賢人位を告ぐ道ありともイニキヤ後人の王とある
強了ありとも云へ女大なるハ國の亡ホロし時中婦政の行
道ハカラス一財不計も切りの事ありしを後不附会してその
理を論へる少く西戎人の弊也信るもありし時とて
事も多かりしをハ不知ヒラスゲと云ふも居る也日蝕の事を云へて
古イミいミ〜〜畏オソすオソ〜〜麒麟の出るハ聖人の祥瑞あり
とて事とて云ひつ道と云ふも妻と出ると節ハ麒麟
不非凡あると云ふも多く可笑事ありしや明の張和
仲と云ふ者此等の附言を云ふ者をさし〜欺天之学

ありと云へるハ〜〜事也

おとの数此餘ホカありも本ある事と云ひつ〜〜書居し
〜〜事〜〜世中ふありとある〜〜事〜〜事〜〜事
天地の神等の大小奇異アヤシキ事沙汰為も生る事少く此天
地の大小奇異アヤシキ事ものありを始免く已る事の大奇異アヤシキ
云ハ〜〜事〜〜事〜〜事〜〜事〜〜事〜〜事〜〜事
凡人タヒトの少奇オチキ智チとて千重チヘの一重も知〜〜事〜〜事〜〜事
如く怪ミヤく拙ツツチき空理ウツリもて測カむと云ふ大直日神の如く
西戎心もて神代の事〜〜事〜〜事〜〜事〜〜事〜〜事〜〜事
鬼神の上の事〜〜事〜〜事〜〜事〜〜事〜〜事〜〜事〜〜事

天津神地津神の大街新為より阿那奇異久礼也
甚も奇異の理斗禮

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

おのまといとやあよりしほより物貞よあより好きてあること
書と母字忍ぶるもあよりことし心さしあきてよりのあ
只道ふちあみあるとの心を心小深くあき免く其あより
免くあよりことしあきね孔子の教釋迦の道とて肉あも
物の名人乃名年の名所乃名あよりあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
道もあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
平田あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

昔心少母をのりきえらるふいとをこころゆくおあえらるせかえ
鈴屋翁の古事紀傳とまゝのたしめよう見えてゆくに
いと福もころふさと物もては深く考へたる果しと
るころを思ひつゝつゝ心いそむことあまのそとをさるめか
て後天しめてやとのねめはゆゑををむること物か
らふふそのまゝいふそまゝにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑにゆゑに
此鬼神とまゝおよそことつゝ心のいそむことあまのそとをさるめか
おふふ吉くまの皇國人の國人のあけつらひまゝに
私にまゝ一筋ふたぢありて説をさるゆゑに世の人おのれあ
てぬかれハ鬼神のさをとまゝとて平田りしふ福きとれ
字もおのれかゝるまゝこと福もころふめてまゝひとて
たふひとて此を鬼神の論ひ新鬼神論とまゝ書をあ
あらりたふひとて此書をまゝに皇國の國人の古事
説を毎くあけつらひ幽冥奇異を直理をとまゝに
論へ今より海は世ふ又うゑまゝにまゝにまゝに
かくと論むこといそむことあまのそとをさるめか
論へとてまゝに此上は論ひありしと鬼ひ益くまゝに
此書の名の新てまゝを直てまゝを直てまゝを直て
りしと又福きとれハ又字信あひだふひ故にまゝに鬼神有
無はまゝにまゝにまゝに論へまゝにまゝに四しあまのそと

ありあむをいせお中の人お心をたうりえさふ方人のうち九子
人すれい有とおまへり孔子はを社述の道おと学へり有の
理のあきやふ小無とおもへり又そ学識ひふりさげり人言
もとよや鬼神ハあき小言ふりて理^理をふりて人ふ言ふ
有ありと云ひくおれり也孔子社述の心たへある^理をい
心つきてハ初めのおも無とおもひつる^理をいへり人言ふ
あやと後くおれり也有^有あふせんと思ふを社述と
その心の底ハ無と認めざる一世人より也。
あり一き^有を学ひふりて^有のよく思ひ考ふる^有無と云ハ鬼神
のあやしくとすし^有理あり有と云ハ今日めあつり形^有をい
せむ無とやせむと思ひつる^有疑ひの心ささ^有あつてつひ

鬼神ハ有無定めき^有とて^有か^有とて^有心あり^有と^有思ひ^有りて^有有
とも無とも定めざる^有あや^有上も^有ち^有き^有論^有ひ^有と^有ハ^有あ^有ん^有て^有い^有て
かく思ひ定めざる^有き^有は^有普通^有の^有あ^有り^有くの^有学^有有^有の^有き^有ハ^有あ^有り
一^有あ^有む^有を^有も^有て^有り^有て^有小^有考^有ふる^有凡^有庸^有智^有を^有尋^有常^有乃^有
学ひ^有て^有鬼神^有の^有の^有と^有や^有り^有や^有あ^有け^有つ^有て^有た^有や^有き^有わ^有き^有ふ^有あ^有り
き^有む^有む^有つ^有て^有ら^有い^有恐^有る^有事^有ふ^有あ^有り^有己^有一人^有の^有あ^有や^有り^有ち^有さ^有る^有
こと^有あ^有り^有も^有あ^有り^有の^有今^有後^有乃^有世^有も^有傳^有り^有て^有幾^有子^有万^有人^有を
ふ^有惑^有ひ^有て^有き^有て^有鬼神^有も^有君^有も^有親^有も^有あ^有き^有もの^有や^有思^有ひ^有あ^有ん
ふ^有ち^有つ^有ひ^有て^有も^有あ^有ひ^有家^有を^有も^有亡^有て^有ち^有ん^有の^有や^有あ^有り^有む
候^有き^有あ^有り^有孔子^有の^有怪^有力^有乱^有神^有を^有か^有つ^有て^有は^有と^有云^有ひ^有ま^有す^有利^有と^有命^有と

仁とをいへるもこの中このそこおひとありん其をさびりて
ちとちこの此平田守一鞍屋の八母の古事フルコトニナヒ学の中とのその
心もてあり有無ふりりりおけふまひしてその後をも破棄
て有ふ定免くそのの端ひをときた戸へいともあふとあむ
おいささこの平田守一の心ふありしかのその心ある一かあね
の心もありしむさふの神の御霊あふんそのこと久しきも
この書をさるの中むらりり一匡

作者江戸人平田半兵衛篤胤といふ書不書を太平翁小
うを得く松坂のやうりりてふふのき務ぬ

文化五年二月

遠江

夏目嘉右衛門 龜満

同 六年二月下旬以龜満主之本寫畢

駿河

村松

真船

同 十二年二月下旬ヨリ三月三日止むの國生船主

本をうまほく写しをぬ

遠江森小野彦藏 利恭

同 年某月の初古事を書写

同

熊吉利

直方

同 十三年四月課和田正以令書寫畢

此書は後小鬼神新論と号し、考へて正しき事ありしことありて
世を行くこと、世の靈の生柱より考ふる彼人、其黄泉の
歸りともある、はいやうしきうちの考へし、人、其黄泉の
きうとを、靈の柱の後、隨ふこと、於其、亦も後、改免
らざりし事ありし、遂に書入候し

同 六卷二頁不田の靈の柱より考ふる彼人

六卷二頁不田の靈の柱より考ふる彼人

六卷二頁不田の靈の柱より考ふる彼人

